

ネットに寄りかかる「生活を考え直す時

神奈川県座間市のアパートで10月末、9人の遺体が見つかった事件は、ソーシャルメディア上に「自殺」をほのめかす書き込みをした女性を言葉巧みに誘い出し殺害するという、近ごろまれにみる獵奇的なものだった。犯人、白石隆浩容疑者がねらったのは高校生3人を含む若い女性8人（巻き添えで男性1人も殺された）。犠牲となつた若い女性に周囲の人びとは何を教えるべきだったのだろうか。

その中でも大事だと思われる3点について整理しておこう。

面識のある友達を大事にする

最近は、分からぬことがあれば周囲の人びとに聞くより前に、インターネット上で調べるのがふつうだという。そういう調子で自分の悩みごともソーシャルメディア上に書き込む。自殺したいという考えが浮かぶと、そのままそれを投稿する。だれでも一度や二度は自殺したいと思つたりするものだが、周囲の人から止められたり、たしなめられたり、本人自体がそう思つたことすら忘れたりして、それで平穀に過ぎていくのがふつうである。

しかし、「サイバー空間は忘れない」。

いつたん書き込んだ文章はほぼ永久に記録され、しかもキーワードで検索されて引き出される。犯人はまさにインターネットの大海上に竿さかを下ろして、自殺志願

の声を釣り上げていた。彼は「被害者のほとんどが本気で自殺しようと思つていなかつた」とも自供している。

自殺と言えば、2004年に集団自殺が頻発したことがあつた。たとえば同年

10月、埼玉県皆野町に駐車中のワゴン車で、男性4人、女性3人が練炭中毒で集団自殺しているのが見つかっている。年齢は20歳から34歳。一緒に死ぬために、とくに面識のないまま集まつた。同じ日横須賀市でも女性2人がレンタカーの中で自殺しているのが見つかった。

インターネット黎明期の事件で、同じ考え方の人びとを広範囲に結びつける新しい道具の威力と怖さを知らしめたが、十数年を経た今日、そういう声をかき集める殺人犯を生んだわけである。

心の中をネットにさらさない

心の中によこしまな考えが湧き出る

ことがあるが、それをうまく処理するのが生きる知恵である。放つておけば妄想は限りなく肥大化し、手に負えなくなる

が、少し運動したり、旅に出たり、瞑想

したりすれば、跡形もなく消えていくこ

とはよくある。大人ならだれでも経験し

ていることである。

自分の中に浮かんだ考えを「悪魔の声」とあるが、それをうまく処理するのが生きる知恵である。放つておけば妄想は限りなく肥大化し、手に負えなくなる

が、少し運動したり、旅に出たり、瞑想

したりすれば、跡形もなく消えていくこ

とはよくある。大人ならだれでも経験し

ていることである。

文字の発明されていない口承時代で

だとして排斥しようとした人々も多い

である。若いころはそれができない。だ

から自分自身に振り回されてしまう。

若いうちはさまざまな悩みを抱えるも

のだが、まず友達、兄弟、親、そして教

師といった身近な人に相談するのが鉄則

である。そういう関係が希薄になつてお

り、だからこそネットに上がるのだろうけれど、その危険性が今回はつきりした。サイバー空間から現実世界に軸足を移さなくてはいけない。

友達は友達でやつかいな問題もある関係であることが大切なである。ネット上には、こういった悩みに誠実に対応してくれる相談所もあるけれど、ネットの向こうの不特定多数を素朴に信頼するのはやめるべきである。

現代社会に潜むデジタルの「影」を追う

市民のための「サイバーリテラシー」

矢野 直明 サイバーリテラシー研究所 代表

No.143 座間アパートの9遺体

やの・なおあき / 1966年朝日新聞社入社。79年出版局『アサヒグラフ』編集部員。88年『ASAHIパソコン』初代編集長。『月刊 Asahi』編集長の後、95年から出版局デジタル出版部長兼『DOORS』編集長。97年総合研究センター主任研究員。2002年朝日新聞社退社。同時にサイバーリテラシー研究所を開設。03年4月から06年3月まで明治大学法部客員教授。06年4月から情報セキュリティ大学院大学客員教授。07年4月から12年3月までサイバー大学IT総合学部教授。著書に『インターネット術語集』(岩波新書)、『サイバーリテラシー概論』(知泉書館)、『総メディア社会とジャーナリズム 新聞・出版・放送・通信・インターネット』(知泉書館、2009年度大川出版賞受賞)など。最新刊『IT社会事件簿』(ディスカヴァー・トゥエンティワン)では、ITの進化により引き起こされたさまざまな事件事故の真相に迫っている。

ウェブ「サイバー燈台」 本連載「現代社会に潜むデジタルの『影』を追う」をめぐる意見交換が目玉です。読者のみなさんもぜひご参加ください。 右画面

プロジェクト欄がオープン サイバー燈台の「専門店街」「プロジェクト」欄では、「映画史に見るサイバーリテラシー」「サイバーグッズ」などのオリジナル・コンテンツのほか、「客員コナー」として有識者の知見を紹介。【New】



サイバー燈台
<http://cyber-literacy.com/>

昔は人をうらやむとか、憎むとかいうような感情が内心に浮かんだ場合、恐ろしいものが外からやってきて自分の中に巣くつたと思ったわけで、だから自殺するとか、人を殺すということを考えるだけで、罪深いことだと感じた。心の健全な働きというものをきちんと教えてやるべきである。公衆の目にふれるネットに内心をさらすなどというのはもつての外なのである。

「書く」と「緊張感をもつ

かつては書き言葉と話し言葉は違うと言われたが、いまや人びとは話すように書く。インターネットの普及で書くという行為に対する緊張感、それなりの覚悟というものがなくなつたが、昨今は、「ものを書いてみんなに読んでもらえば金が入る」というシステムが蔓延して、書くという行為の意味が大きく変質した。このコラムでもふれたキュレーションサイト、ユーチューバーなどがその例である。たとえば今年7月、俳優の西田敏行さんが覚せい剤で近く逮捕されるという偽情報を流していた3人の立派な大人(40代から60代の男女)が、偽計業務妨害の容疑で書類送検された。彼らは週刊誌記事の匿名容疑者を勝手に西田さんと断定して、自分たちのブログに書き込んでいた。

8年ほど前にも、お笑いタレントに関する誹謗中傷記事を書いていた女性会社員など19人が脅迫や名誉棄損の疑いで摘

発されている。彼らは、ほとんどネットのデータラメな書き込みを鵜呑みにし、本気で「殺人犯」と思つたり、むしゃくしゃしていて、腹いせにやつたりしていた。身元を特定され、取り調べで刑事から真実を告げられると、ほとんどの人が他人に責任をなすりつけた。

7月の事件で注目されるのが、その動機の変化である。3人は警察の調べに対しても、「広告収入を得るために」「ブログを読んでほしかった」と述べた。ここにブログで広告収入を稼ぐ、あるいは

多くの人に読んでもらおうとすれば、アクセス数を高めることで、ブログ運営者からの見返り収入を期待するという背景が示されている。

多くの人々に読んでもらおうとすれば、事実よりも話題性に関心が向かつ。どうしても表現は過剰になり、極端な場合、嘘でもいいということになる。

これは今回の事件と直接関係はないが、書くという行為の変質を受けて、あらためて文章を書く、メッセージを書き込むという「行為」の意味をきちんと教えたほうがいい。



イラスト kkkkkkkkkkkkeeeeiiiiii